

職場の日々

大学事務の面白さ — 国際交流を通して —

今泉 慶子

昨年の四月、生まれてはじめての人事異動によって、七年間務めた教務学生課から新設の部署である「芸術文化交流室」に籍を移すことになった。

この「芸術文化交流室」は、「学内外の文化情報の収集発信」を目的として設置され、担当業務は「国際交流」「生涯学習」「卒業制作展(美術・デザイン学部卒業予定学生の展覧会)」「アート&デザインセンター(ギャラリー)を持ち、ニュースレターの発行などを行っている学内施設」の運営、「後援会」その他諸々となっている。名前こそ物々しいが、まあ言ってみれば「情報発信の何でも屋」である。

外部に発信、ということ以外は互いに

脈絡のない業務を兼務するのは、同じ大学事務でも教務学生課時代とはまるで別の経験をしているように感じられる。当然、その中で生まれる人間関係も、学生と教員との接触がメインであった以前のものとはがらりと変化した。中でも、私にとつて最も大変で、最も楽しく、そして色々なことを考えさせられるのが、留学生との関わりである。

● 本学の国際交流

名古屋芸術大学は、音楽学部、美術学部、デザイン学部の三学部で構成されており、短期大学部も合わせると、現在十六カ国二十六校と学術交流協定を結んでいる。学生数は、私費留学生・交換留学生を合わせて、多いときでも二十数名程度である。このうち協定校からの交換留学生を、芸術文化交流室が担当している。彼らの国籍は、韓国、イギリス、フランス、ドイツなどをはじめとして、時にはフィンランド、ノルウェー、メキシコ：

とさまざまである。各学校との取り決めによっても異なるが、彼らは本学に三ヶ月から一年の間滞在することになる。

● カウンターを訪れる留学生たち

日本での生活をスタートさせた交換留学生達は、とりあえず慣れるまでは、何かと芸術文化交流室のカウンターにやってくる。まだ日本語ができない彼らに接する時には、たいいていの場合、英語が(ジエスチャーやイラストなども)コミュニケーションツールとなる。入れ替わり立ち替わりだったり、あるいは連れ立って、色々な国からの学生がにぎやかにカウンターを訪れると、時々頭が混乱しそうになることもあるが、とても面白い。こんな仕事をしていなければ、あまりできない経験をさせてもらっていると思う。

しかし一方で、仕事として使うに十分な語学力も留学経験もない自分にはゆさ、情けなさを感じてしまったりもする。

彼らに不便な思いをなるべくさせないようになりたいという気持ちで接していても、自分に足りない部分を補うことができていないのではないかと不安に陥ってしまうこともある。

●日本人学生との交流

そうこうしているうちにも、彼らは日本での大学生活に少しずつ馴染んでいく。学内でも、日本人学生と楽しそうに過ごしている姿をすぐに見かけるようになる。(ある時など、留学生が日本人学生を台車に乗せて運んでいるところを目撃してしまった。)

私が見ている限り、本学には、おおかたで人なつこい気質を持った学生が多いように思われる。物怖じせず留学生たちとうちとけていく彼らを見ていると、頼もしくもあり、また自分の励みにもなる。しかし中には、留学生たちと友達になりたい気持ちはあるけれど、なかなかきつかけがなくて…という学生もいる。そ

こで、今年度から交換留学生のウェルカムパーティーを開くことにした。留学生の専攻と違う学科であっても、国際交流に興味のある学生に対して、少しでもきつかけを与えることができるようになればいいと思う。

●学内でのイベント

ウェルカムパーティーのほかにも、料理交換会というイベントも行っている。これは、学内の調理施設を使って、留学生たちがそれぞれのバックグラウンドを生かした料理自慢をするというものである。例えば同じフランスの大学から来ている、生粋のバリっ子、出身が台湾の者、中米生まれ…と様々な生い立ちを持つていたりする。また、本場の食材を、わざわざ実家から送ってもらったりするほど気合いの入った者もいる。そんな彼らが思い思いに作り上げた料理を、学生や教職員を招いて披露するのである。

…と、ここまで書いてみると、なんだ

かパーティーばかりしているように思われてしまうかもしれないが、留学で日本に来ていたのだから、もちろん研究にだって励んでいる。例えば美術・デザイン学部では、各学期の最後には、学内ギャラリーで交換留学生だけの展覧会を開催している。彼らの作品を見ると、自分の経験した日本を、異文化の感性というフィルターを通して表現しているのがよく分かる。日本人学生にとっても、彼らの作品を見ることで、新しい刺激を受け、ますます視野を広げていくことができているのではないだろうか。

●国際交流に対する理想

こうした展覧会だけでなく、色々な体験を通して、学生も、教職員も、そして留学生たち自身も新しい発見や、成長へのエネルギーを与え合うことができれば、国際交流は大成功だと思う。

本当は、もっと多種多様なイベントを展開していきたいのだが、いかんせん「何

でも屋」しかも専任スタッフは、二つのキャンパスでたったの三人である)なので、国際交流だけに重きをおくわけにはいかず、つい片手間になってしまふ。

私は、本来なら国際交流担当者は、専従として配置されるかわりに、イベント時のみならず、いつ何時でも留学生(受け入れ、派遣ともに)のケアができるよう待機できているのが理想的だと考えている。しかし、残念ながら、まだ大学としての受け入れ環境を改善するには至っておらず、果たして本学の国際交流は、「交流」と呼べるものなのだろうか…と疑問に感じることがある。

●留学生の帰国に思うこと

交換留学生たちの帰国の日が近づいてくると、何度送り出しても別れは寂しいものだなと思う。

彼らの帰国のときに、必ずプレゼントしているものがある。それは、大学生活の様々な場面で撮影したスナップ写真を

留学生一人一人に合わせて選別し、アルバムのような形でCD-ROMに焼いたものである。そして、ディスクの表面にはメッセージを書くようにしている。日本の、名古屋芸術大学に留学してよかった、と思つて帰国してもらいたいと願つてのことである。

また、別れがづらいのは、学生同士ならなおのことである。留学生が、空港まで見送りに来てくれた日本人学生の頬を両手で包んで、大粒の涙をこぼしているのを見たときは、思わず私までもらい泣きしてしまうほどであった。世界中で国際問題が取り沙汰されている現代だが、このような交流がどんどん広がってほしいと思う。

芸術文化交流室の仕事に關わつて初めて、「大学における国際交流の意味とは…」と考えるようになった。教務学生課の時とはまったく違う経験をして、大学を知る切り口は仕事の数と同じだけあるのだと改めて気付かされ、大学事務の面

白さとはこんなところにあるのかもしれないと思つてゐる。

いまいずみ・けいこ

名古屋芸術大学芸術文化交流室

